

知的障害教育における対話的な学びの探求（4）

—高等部における「自分の考えを整理し，表現する力を育む授業作り」—

福田陽一郎・大塚 政紀・神山 陽啓・齋籐 大地・福田 奏子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

知的障害教育における対話的な学びの探求 (4)[†]

—高等部における「自分の考えを整理し、表現する力を育む授業作り」—

福田陽一郎*・大塚 政紀*・神山 陽啓*・齋藤 大地**・福田 奏子**
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校*
宇都宮大学共同教育学部**

本稿では、知的障害特別支援学校高等部における対話的な学びの在り方について、授業実践から見えてきた生徒一人一人の学びの姿や支援の手立ての検討を通して、高等部における対話的な学びに対する考え方を提案する。「自分の考えを整理し、表現する力を育む授業作り」という学部テーマのもと、安心して取り組める環境を作ること、考えを表現したり、他者の考えを受け止めたりする場面を設定すること、考えが深まるような学習課題と発問を工夫することといった授業作りのポイントを設定して授業実践を重ねた。その結果、生徒一人一人が課題に向き合い、試行錯誤する姿や、仲間の気付きを受け止めて考える姿が見られた。これらの姿は、高等部で大切にしてきた対話的な学びの姿であり、複雑な状況のなかで生きるために必要となる「自ら考え、判断して行動を調整する力」につながると考えた。実践を通して見られた、様々な生徒の姿から、生徒自身が課題と向き合い、活動や体験を通して得た互いの気付きを基に考える授業を、対話的な学びの一つのかたちとして提案したい。

キーワード：対話的な学び、考えを整理し表現する力、知的障害特別支援学校

I はじめに

本校の高等部には、知的障害の他に、自閉症、広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害等の障害を併せ有する生徒が在籍している。指示をよく聞き活動できたり、他者との関わりを好み、自分から友達や教

師に関わろうとしたり、興味のあることについては、進んで相手に伝えようとしたりする様子が見られる。一方で、指示がないと失敗することに不安を感じ、なかなか活動できなかったり、自分の考えをもっているものの、その考えに自信がもてず他者に伝えることが難しかったり、考え自体が一方的だったりする様子が見られ、人との関わり方ややり取りの仕方に課題がある。

高等部では、これらの生徒が対話的な学びの在り方を考えるにあたり、「自分の考えを整理し、表現する力を育む授業作り」をテーマに掲げ、三年間の研究計画を立て、実践を行ってきた。その結果、一年次の研究を通して、一人一人が表現できる手段の保障と、考えを深めるための発問の工夫が必要であることが分かった。また、授業のねらいと内容を考慮して、学習集団を構成することも重要な視点であることが分かった。二年次の研究では、事例研究を通して、改めて安心できる関係性の構築が大切であることが分かった。その上で、他者の思いや考えを受け止め、自分の考えをまとめていくという双方向

[†] Yoichiro FUKUDA*, Masanori OTSUKA*, Takahiro KAMIYAMA*, Daichi SAITO** and Kanako FUKUDA**: Exploring Dialogical Learnig in Education for children with Intellectual Disability (4): Creating lesson that foster the ability to organize and express one's thoughts in high school student

Keywords: Dialogical Learnig ,Abilities to organize and express one's thoughts, School for children with intellectual disabilities

* Special Needs School Attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: daichis@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

(連絡先: k-fukuda@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

のやり取りを重ねることが大切であった。その際に、教師の役割や振る舞い方(生徒同士の考えをつなぐ、揺さぶる、内容の理解を助ける等)も重要な要素であった。最終年次に向けては、さらに生き生きとした学びの姿が表現されるように工夫や改善を重ねることで、一人一人にとっての有効な手立てを検討し続けることが重要であると考えた。

研究の最終年次である今年度は、これまで取り組んできた実践を基に、授業作りのポイントを整理した。そして、実践から見えてきた授業作りの在り方を、知的障害特別支援学校における対話的な学びの一つのかたちとして提案する。

II 目的

本研究の目的は、授業作りと生徒一人一人の学びの姿や手立ての検討を通して、本校の高等部における対話的な学びの在り方について検討し提案することとした。

III 方法

学部テーマ「『自分の考えを整理し、表現する力』を育む授業作り」を踏まえ、一人一人の目指したい姿を設定し、授業作りのPDCAサイクルを基に、教育実践を行った。

IV 結果

1 「情報モラルを知ろう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

高等部Aグループは、縦割り13名で、グループの全員がスマートフォンやタブレットなどの情報機器を自由に使える環境にあり、そのうち80%を超える生徒がSNSを利用した経験がある。また、SNSを利用する生徒の多くが、家族や親戚以外の人とメッセージのやり取りをしたことがある。直接会ったことのない人とやり取りをしている生徒もいるため、トラブルに巻き込まれる危険性がある。

本単元で扱う情報機器は、正しく活用できれば利便性の向上につながる一方、情報モラルを十分理解しないまま使用することで、トラブルに巻き込まれてしまうこともある。本時は、仲間に見せたい写真を、SNS上に公開する際の注意点について考えたり(思考力・判断力・表現力等)、仲間に見せたい思いと公開する際の注意点を踏まえて、撮影しようとした(学びに向かう力、人間性等)することを

目標に実践した。

(2) 授業作りの工夫

導入では、「中学校時代の級友から、『今の学校の様子を教えて』と頼まれたので、SNSを通じて写真を送った」という事例を確認し、公開した写真の問題点を考えた。状況に応じた対応について問うことから、写真を用いて、問題事例を分かりやすく伝えた。また、インターネットの公開性から、思わぬかたちで情報が拡散しトラブルに巻き込まれる可能性があるため、複数の相手に写真を公開する際には、「人物の撮り方」、「着ているもの」、「周りの風景」に注意して撮影することを伝え、状況を踏まえて考えるための知識を示した。

展開においては、三つのグループを作り、生徒同士で話し合いながら写真を撮影した。ここでも、課題を分かりやすく示し、一人一人が課題解決に向けて活動できるように、人数や関係性等に配慮してグループを編成した。また、撮影に至る前のやり取りや、撮影した写真を介した相互評価等、写真撮影という活動を通して、自他の考えを伝え合う機会を設けた。その後、撮影した写真の中から、公開してもよいと考える写真を話し合って選んだ(図1)。話し合いの場面では、安心して意見を伝え合うことができるように、生徒の考えを板書し、意見を整理して比べることができるようになり、話し合いの形式を示した「話型シート」を用い、考えるポイントを明確にしたりする等、視覚的な支援を活用した。



図1 グループで意見を伝え合う様子

振り返りでは、グループごとに、本事例において公開してもよいと思った写真とその理由を発表した。それぞれのグループで考えた意見を認め合い、その良さを生かすために、教師が言葉を補ったり、情報を整理したりしながら、生徒一人一人が自身の考えを広げ深めていけるようにした。

(3) 実践を振り返って

本時の授業を通して、グループごとに公開しても

よい写真を撮影する場面では、自分の撮りたい写真（例えば「かわいいポーズ」と、仲間が注意している様子（例えば「名札を隠す」）を見て、どういうポーズがよいのかを改めて考える姿が見られた。また、他のグループの意見を聞く場面では、自分の考えとは異なる意見に関心をもつなど、相手の意見を受け止めて、自分の考えを深める姿が見られた。

SNS上で写真を公開するにあたっては、慎重な判断ができる知識や態度を身に付けなければならない。本時では、問題事例を通して、「人物の撮り方」、「着ているもの」、「周りの風景」を、注意すべき点として示した。この点を踏まえ、写真を撮る活動を通して、考える機会を設けた。生徒同士でやり取りを重ねるなかで、異なる意見を受け止めながら、自分の意見を発表する姿が見られた。今後は、SNSが生徒の世界を豊かに広げるツールであることも踏まえ、絶対的なルールだけで判断するのではなく、個別具体的な状況のなかで判断するような問い（公開対象による対応の違い等）を基に、考える機会を設定していきたい。

2 「写真アプリを使おう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

高等部Bグループは、縦割り12名で、タブレット端末に興味をもっている生徒は多いものの、動画の視聴以外で自ら活用できる生徒は少ない。また、自分の考えを自ら伝えられる生徒と、選択肢や伝え方の助言があれば伝えられる生徒がいる。

本単元では、タブレット端末のアプリの中でも、使用頻度の高いものとして、写真アプリの使い方の学習を行った。アプリでできることを知ることで、余暇の楽しみ方、コミュニケーションツールとして活用できるのではないかと考えた。本時（4／全6時間）では、写真加工アプリを使い、写真を撮ったり、写真を加工したりすること（思考力、判断力、表現力等）、写真の撮影や加工に興味をもって、撮影しようとする（学びに向かう力、人間性等）を目標にして実践した。

(2) 授業作りの工夫

導入では、教師が撮影した好きなものの写真を見て、使用した写真加工アプリ（Clips）の名前とアイコンを確認した。食べ物やアニメをテーマにした写真を示したり（図2）、事前に生徒の好きなものを把握し、撮影に使うグッズを準備したりした。それにより、「好きなものを撮影する」という学習課

題の設定を理解でき、「やってみたい」、「こんな写真を撮ってみたい」といった意欲を引き出すことができた。



図2 学習課題への意欲を引き出す場面

展開では、「好きなものを撮影する」Iグループと、「スタンプを使って撮影する」IIグループに分かれて活動した。Iグループでは、好きなものを撮影したり、グッズを身に付けて自撮りしたりと、対象物を自由に撮影する活動を行った。撮影したいと思える対象物を用意したり、手順と撮影回数を伝えたり、活動の見通しを分かりやすく示した。IIグループでは、食べ物のスタンプを使って自撮りしたり、好きなものを使って仲間と写真を撮影したりした（図3）。



図3 仲間と楽しそうに撮影する様子

撮影している様子は、電子黒板等の大きな画面に映し出した。画面を共有しながら、互いに撮影したり、見せ合ったりする場面を設定した。また、撮影時のポーズや役割を、互いに伝え合うといったやり取りを重ねた。その際、言語で伝えることが難しい生徒に対しては、教師は表情や動作から気持ちをくみ取ったうえで、思いや考えを代弁して生徒同士のやり取りをつないだり、写真を現像して見せ合うことで喜びを分かち合ったりする等の支援をした。

振り返りでは、大きな画面に映した写真を見たり、現像した写真をホワイトボードに飾り、「いいね」と思った写真に花を貼って賞賛し合ったりした。自分が撮影した写真を紹介し、仲間から賞賛される場面を設けることは、認め合う関係づくりにつながった。

(3) 実践を振り返って

本時の授業を通して、仲間の決めたポーズで写真を撮る場面では、教師が端的に考えを伝えることで、仲間が撮りたいポーズを受け入れるといった姿が見られた。これは、仲間との望ましい関わり方につながる学びであった。また、撮影した写真をスクリーンで紹介する場面では、友達から賞賛を受けると、全身で嬉しさを表現して、「ありがとう」の気持ちを仲間に伝える姿も見られた。

友達と楽しく写真を撮影することに焦点を当てた授業の展開は、校外学習や修学旅行といった場面でも活用できるスキルにつながると思われる。前回の授業の振り返り(3/全6時間)において、生徒の「撮影したい」というモチベーションは、人だけでなく物に強くある生徒もいるのではないかという話題が出た。本時では、それらを踏まえ、関心の強いものをテーマにして撮影し、振り返りの機会を使ってやり取りを重ねることを試みた。自分の好きなものを撮ることで満足感を得ることができ、「それいいね」、「かわいく撮れているね」等と互いに賞賛し合う相互評価の機会を設けたことで、さらなる充実感につながる事ができた。

V 考察

高等部では、学部テーマ「自分の考えを整理し、表現する力を育む授業作り」を踏まえ、授業作りのポイントを検討しながら、対話的な学びに基づく教育実践を積み重ねた。

研究の最終年度となる今年度は、単元・題材のなかで、一人一人の学びを見つめながら授業改善を図ってきた。本時を計画する前に行った授業研究会において、授業を行った教師からは「自分と異なる意見を踏まえて、さらに考えるためには」、「さらに生徒の表現を引き出すには」等といった、学部テーマをさらに深めるような観点での話し合いが行われた。

二つの授業は、学習の形態や生徒の実態等に違いはあるものの、一つの大きな方向性をもって授業が

計画されていた。それは、「生徒自身が課題に向き合い、活動や体験を通して得た互いの気づきを基に考える」という点である。生徒自身が向き合う課題とは、絶対的なルールを基に判断するだけのものではない。課題に真摯に向き合うことによって、多様な気づきが生じる開かれた問いであるともいえる。

高等部Aグループの「情報モラルを知ろう」では、友達に写真を送るという問題事例に対して、三つのグループに分かれ、適切だと考える写真を撮影した。三つのグループが提案した写真について、理由を聴き合いながら比べることによって、SNSにおける個人情報の取り扱いについて考える姿を引き出すことができた。高等部Bグループの「写真アプリを使おう」では、自分の好きなものを撮影するという課題に対して、仲間と写真を撮り合ったり、自分が撮影した写真を見てもらったりするなかで、互いの写真の面白さを認め合い、自らの撮影に活かそうとする姿を引き出すことができた。

一人一人が課題と真摯に向き合うからこそ、互いに関心をもつようになり、自分と他者との違いや良さへの気づきが生まれる。それらを認め合い、考えることによって、新たな認識が作られる。これが、高等部で大切にしたい対話性の姿であり、複雑な状況のなかで生きるために必要となる「子どもが自ら考え、判断して行動を調整できる力」につながると考えた。

そのために、教師は、魅力的で分かりやすく、かつ共に考えることのできる開かれた問いを設定したり、互いの気づきが共有できるように可視化したり、代弁したりすることが必要であった。

高等部では、「生徒自身が課題に向き合い、活動や体験を通して得た互いの気づきを基に考える」授業を、知的障害教育における対話的な学びの一つのかたちとして提案したい。

付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校における令和三年度校内研究の高等部研究（メンバー：伴怜子、備前智史、鎌田麻恵、神山陽啓、熊谷妃、大塚政紀、齊藤祥平、福田陽一郎、齋藤大地、福田奏子）として共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。

文献

安西一樹・齋藤大地・福田奏子（2021）知的障害特別支援学校におけるエピソード記録による一人一人の対話性の探求（4）—高等部事例研究『『自分の考えを整理し，表現する力』の育成』—宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要，第8号，507-512.

伴怜子・安西一樹・須藤里江・池本喜代正・福田奏子（2020）知的障害特別支援学校における対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造（4）—高等部における「自分の考えを整理し，表現する力を育む授業作り」—宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要，第7号，593-597.

令和4年4月1日 受理

Exploring Dialogical Learning in Education
for children with Intellectual Disability (4):
Creating lesson that foster the ability to organize
and express one's thoughts in high school student

Yoichiro FUKUDA, Masanori OTSUKA, Takahiro KAMIYAMA,
Daichi SAITO and Kanako FUKUDA